

地域別懇談会【盛岡ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.16:於アイーナ]

- ・ 40人を標準とするということだが、40人以下でもよいという解釈もできるのか。
- ・ 少人数学級の他県の状況を教えてほしい。(学習指導への影響、財政負担等のメリット・デメリット)
- ・ 資料2 P2下から3行目、「基本的な教職員定数とは別に～全額地方交付税措置がなされるものである。」とある。ここを読むと、交付税措置がなされるのであれば、学級定員を減らして教員を増やせるように思える。これは正規採用の教職員ではなく、非正規採用で増やすという意味なのか。現場では講師も正規採用の教員と同じ仕事をしているが、身分的には不安定な状態である。また授業での生徒の人数が多く、目が行き届かないことも指導力不足とされてしまうような状況を教育委員会ではどう把握しているのか。
- ・ 資料3から小規模校はメリットもあるが、デメリットも大きいと感じる。盛岡市内にある大きい学校のクラス数を減らして、周辺部の学校のクラス数を多くするということはできないか。全体を見た学級配置を行っていただきたい。
- ・ 資料4によると盛岡南高校の体育科、体育コースの就職先が、学習内容とリンクしていないことをどう捉えるか。
- ・ 学区外許容率の考え方について確認をしたい。
- ・ 先進国を見れば学級定員40人は多い。今後は少人数への流れになっていくと思う。財政面での課題等もあると思うが、これからも取り組んでもらいたい。
- ・ 小規模校だけ削るのではなく、全体のバランスを見て考えて欲しい。地域の学校がなくなると、地域の経済や過疎化への影響が出るという広い視点でお願いしたい。
- ・ 周辺部の学校が存続するためには地域に合った特色ある学科が必要である。
- ・ 保護者の収入にも開きが出てきており、通学費を出せない家庭もある。高校生が県内に仕事がなく戻ってこないのではないかと不安を感じている。高校再編の場でも、生きる場としてふさわしい環境をどうやって作っていくかということまで考えるべきである。田野畑校も小さいながらも特色ある取組を行い、先生方も努力していた。そういったことが吸い上げられるような計画にして欲しい。

地域別懇談会【岩手中部ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.12.16:於花巻市文化会館]

- ・ 3学級以下の規模の高校はなくすという計画を立てるのか。
- ・ 自動車産業等において工業系の人が必要とされると思うが、農水等の地場産業の人材育成と学科の関係をどう考えていくのか。
- ・ 人口密度が低い地域に標準法の教員配置基準が合うのか疑問である。小さい学校には多くの科目を教える先生がいればよいと思う。生徒を競い合わせて進学させなければならぬのか、産業等地域の実情に合った内容で教育していくのか。数字だけ見ていると大きな規模の学校で学ぶのがよいとしか聞こえない。少ない人数でも子ども達を生かしていける指導はないか。
- ・ 広い範囲から生徒を中心部に集めようとするれば、生徒個々で経済的な負担の状況が異なり、統一した考えではできないことが出てくるのではないか。
- ・ 小規模校だとキャリア教育や切磋琢磨ができないように聞こえる。大迫高校や西和賀高校のような、様々な事情を抱えている生徒を救える学校としての役割を考えて欲しい。
- ・ 西和賀高校がなくなった場合の経済損失について議論する場ではないが、町のシンボルとしても必要であり、残して欲しいというのが希望である。県教委の学級減を進めなければならないという考えと我々の学校を残したいという考えとはなかなか議論が噛み合わないと思うが、岩手中部ブロックにおいても一定の役割を果たしている学校という認識を持っていただいて計画に反映させて欲しい。
- ・ 高校標準法にとらわれない岩手独自の少人数学級の方向性も議論の中に組み入れていけるのか。
- ・ 資料には「必要学級数」と出されているが、各学校に対して必要な学級数という形でシミュレーションしていくのは数字が一人歩きして、別の意味を持つのではないか。ブロックの中では公立高校と私立高校があり、それに対して地域の中で想定される生徒数ということであると思うが、ブロックの中で公立高校の充実を図っていくというとらえ方をしていただきたい。

地域別懇談会【胆江ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.24:於奥州市水沢公民館]

- ・ 前計画は結果的にどうだったのか。現状と国の方針だけ出されても数字だけを追っているように感じる。40人学級で行けば生徒数が減っているのだから、学級や学校を減らすための口実にしかならない。生徒数が減って行くことに対して、今後どうしていくのかということがほしい。
- ・ 長期構想検討委員会はどのようなメンバーだったのか。会議結果等は公開されているのか。
- ・ 来年度策定するものを今やっているということは場当たりのではないか。もっと先を見越した形でやらなければならないし、回数ではなく内容が大事である。
- ・ 前計画時に、産業教育の中で商業教育をどうするのが見えないという意見を申し上げ、計画に対して反対をした。結果的に水商と水工が統合されなかった。
- ・ 前計画によって統合したところは新しい校舎となっているのでよい学習環境になったと思うし、子供たちにとってもよいことである。できれば耐用年数に近い校舎は改築してほしい。
- ・ 学習意欲については専門高校の資格取得もバロメーターになると思う。スペシャリストを作るのも必要ではないか。
- ・ 資料3の数字は全国のデータであり、大都市も含めたものでありこのような数字になる。広大な県土、産業構造、就業構造を見ながら本県の高校教育の方向性を考える必要がある。
- ・ 10年前は地域の合意を得なければならないという動きだった。小規模でも地域で必要な学校は存続すべきという考え方が広がり、その事が背景になり水商、水工の統合反対の署名運動が起こった。今回の地域検討会議の中でも同様の声が多く地域で上がっている。そういう声を計画に反映させるべきである。地域から学校を減らしてもよいという声を待っているのではないかと勘ぐりたくなる。
- ・ 望ましい学校規模が4～6学級とあるので、3学級の金ヶ崎高校がなくなるのではないかと不安がある。例えば望ましい学校規模を2～5学級としてそういった不安を取り除く必要があるのではないか。
- ・ 義務教育では35人学級の動きがあるので、高校も岩手県が先陣を切ってやるべきである。胆江ブロックは全部の学科が揃っており、35人学級を実験的にを行い、全県に広げていくことも考えてよいのではないか。来年度から国からの補助金が一括交付金となる動きもあるようだが、その全てを高校教育につぎ込んでほしい。
- ・ 少人数学級にして、教職員の不足分を県単としてできないのか。
- ・ 県教委としての独自性があってほしい。国の仕組みを守っていくと、結局数合わせにしかならない。5年後は35人学級にしたいという計画があってもよいのではないか。大胆に高い視点から論議してほしい。
- ・ 文科省の基準は全国的なものであり、岩手県にはそぐわない。岩手県独自の教育行政があるべきと考える。専門高校は地域と密接な関係にあるため、学級数が少ないから、定員割れだからという理由で統合するのはいかがなものか。普通高校と専門高校は分けて考える必要がある。4～6学級規模の学校は盛岡にしか残らない。財政的な部分は何とか考えてほしい。

- 標準法に従ってやるのか、岩手県の独自性でやるのか。県独自で人材育成のために教育にお金をかけるべきである。
- 県の広域振興圏と高校のブロック配置との関係はどうなっていくのか。
- 40人定員を頭から切り離して欲しい。そのためには国への働きかけも県教委だけでなく、住民の運動も行っていく必要もある。
- 岩手の高校教育、産業教育をどうして行くのか。

地域別懇談会【両磐ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.19:於一関地区合同庁舎]

- ・ 地域外に行かざるを得ないことに危機感をもつ。未来の子どもたちのため、生徒の要望が叶う学科等の設置をお願いしたい。特に、一関工業高校に専攻科及び機械科と、一関二高に福祉系の設置をお願いしたい。卒業後地域に残れば、税金を納めてくれる。
- ・ 小規模であっても一定の評価があり、一方では、ある程度の大きい規模の学校が良いとの説明があったが、学校・学科の配置において、どのあたりが線引きになるのか。通学の距離の落としどころはどこか。
- ・ 学級数が減ることによって、教員数も減るといったことだけで決めてほしくない。生徒の進路を見据え、生徒が主体となる再編になってほしい。
- ・ 一番の問題は少子化であることが理解できた。一関工業高校の機械科及び専攻科の設置要望がある。一方で、一関高専には機械工学科及び専攻科がある。高校と高専の位置づけや差別化をどのように図ろうとしているのか。
- ・ 少子化を考えると10年後はそうとう厳しい。地域の中にメインとなる学校を検討してもらいたい。また、統合化も進む可能性もあり、今までのやり方と違う変革をすべきであり、そのために、寮の設置を検討すべきである。

地域別懇談会【気仙ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.17:於大船渡地区合同庁舎]

- ・ 岩手県は教員の人事異動の期間が6年と聞いており、他県と比較して短いけどどのような理由からか。
- ・ 県教委が岩手の高校教育をどうしたいのかが見えてこない。子どもの数が少なくなるからこそ教育費をかけるべきである。独自に少人数学級を実施している都道府県の状況を教えてほしい。
- ・ 兵庫県では過疎地こそ中高一貫教育校という形で施策を推進している。また、北海道の鹿追町においては、2学級校であるが文部科学省の指定により中高一貫校を実践しており、他県では小規模校でも新たな高校の形を模索している。こういうことが大事なことではないかと思っており、少子化であるだけ、グローバルな社会に出ていく子どもたちにとって人材育成は重要なことである。人数だけで切るのではなく、新しい方策を計画に盛り込んでいただきたい。
- ・ 懇談会を2回にわたって行ったことは感謝しているが、説明をしたということで終わらせず、十分に意見を考慮し、意見がこういう形で反映されたと納得できる計画にしてほしい。
- ・ 十分に教育の機会均等の保証を加味した計画にしてほしい。
- ・ 住田町では、過疎地だからという形と、子どもたちの高校選択の幅を広げるということも含めての中高一貫校を提言したものである。アクションプランを作り、設置がなされたならば、寄宿舎等の支援策を出すものである。こういうところも十分、再検討してほしい。
- ・ 望ましい学校を4～6学級としたことについて、子どもの成長段階の教育において、競い合う中で教養を身につけさせていくべきか疑問がある。個々の個性や能力にできるだけ近づけた教育機会を与え、その上で社会において自立する子どもたちを育成すべきと考える。
- ・ 小規模校であっても、教育の質の確保や多様な進路希望への対応指導は、地域の人材の協力を貰い、活用することで補うことができるのではないか。また、部活動の選択の幅が狭いことについては、社会において選択肢が狭いことは多々あり、少ない中で選択し、活躍することも大事であると考え。
- ・ 長期構想検討委員会の報告を示すだけでなく、県教委の対応を示して貰えれば、具体的にブロックの高校配置を考えることができると思う。
- ・ 少子化をベースとして計画を策定する方向性が色濃く出ている気がする。それもやむを得ない部分はあるが、生徒が進学したくなるような新たな学校づくりもしてもらいたい。

地域別懇談会【釜石・遠野ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.12.21:於釜石地区合同庁舎]

- 学級編成の標準について、高校は小中学校とは異なり、多様な課程、学科等で構成されており、生活集団と学習集団が異なるということであるが、学習指導は 20 人や 30 人で実施していて生活指導だけが 40 人ということであれば、少人数学級が達成できるのではないか。
- 専門高校は実習を中心として少人数での指導がなされているようだが、学級定員のあり方は、実業高校の状況に偏って少人数指導が実施されているという分析が基になっているのではないか。普通高校は基本的に 40 人となっているのが現状ではないか。
- 遠野では、進学を望む子供と就職あるいは専門学校を望む子供と 2 つに分かれているようである。その中でひとつの高校になると、どうしても選択肢が限られてしまい、他の地区に行かざるを得ないという状況が出てくると思う。地域の産業振興上も現在の 2 校体制の存続が望ましい姿であり、定員が割れてきた場合、高校そのものの経営努力、魅力づくりが必要であると感じている。

地域別懇談会【宮古ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.22:於宮古地区合同庁舎]

- 資料 3-2-(4)の課題の中に、学校不適應や特別な支援を要する生徒が多く、教員の負担が大きいとあるが、それは生徒の人数が多いということか、それとも教員 1 人当りの割合が高いということか。
- 資料 3-1 で、全国の比較のデータが載っているが、東北のデータはあるか。
- 様々な子どもが入学しているが、岩手県の高校進学率はいくらか。
- 望ましい学校規模 4~6 学級について、3 学級を基準にした考え方はできないか。
- 地域から学校がなくなるという不安を解消することが大事である。「2 学級以上あればよい。1 学級はだめ。」といったことを明確にし、地域にあった計画を立ててほしい。
- 高校標準法では、1 学級 40 人が標準となっており、県の裁量で変更は可能ということであるが、40 人を下回る数にするとマイナスの面があるのか。宮古北高校が 1 学級となったが、前回 (10/15) の懇談会では県教育委員会議で決定するという話を聞いていた。計画策定の中での 1 学級減は納得いかない。いつ決まったのか。11 月 9 日に田老地区の出前懇談会を開催した。そのときの意見については、懇談会と同様に意見として受け止めてもらえるのか。
- 宮古北高校は、2 年から進学コースと就職コースに分かれるが、1 学級になった場合どうするのか。宮古北高校への入学者数が 23・24 年度 50 人程度と推計しているが、50 人応募したら 1 学級増やすのか。
- 田老地区の出前懇談会の終了後に話し合いを持ったが、2 学級に戻したいとの意見があり、普通科の中でのコース分けもよいが、新しい学科を設置できないかとの意見もあった。学科については、こちらの考えはなく、県教委で案を作ってもらいたい。
- クラスが大きくなければ切磋琢磨できないのか、切磋琢磨しなければいけないのか。学校不適應や特別な支援を要する生徒にとっては小さい学校の方がよいとも考える。一方で、小さな学校でよいのかということも疑問に感じている。青森県では校舎制を取り入れ、小さな学校が残っているが、岩手県では研究しているのか。
- 宮古北高校の 1 学級減について、応募者が 43 人で合格者が 37 人、応募者が募集人数を 40 人割ったときと受け止めていた。学校・学科の配置について、県教委としての考えはあるのか。宮古高校と宮古商業高校以外は望ましい学校規模に適應しない。普通科高校で進学・就職両面に対応している学校をどうするのか。地域の実情に応じて対応できる学校としていくとあるが、それを本当に保証できるのか。教員も減り、ギャップがあるのではないかと。生徒の進路希望に応じた保証をしていくことが大事である。

- 岩手日報に教職員アンケートの記事が載っていた。県内の町村から高校がなくなることが懸念される。1学級校は学校として難しいと思うが、35人で2学級確保できれば学校運営はできる。そうすることによって、安心して岩泉高校に入学させられるとの声がある。岩泉高校は地域とともに頑張っているのだから、1学年2学級の手本であると思う。35人学級という声が、先生方から聞こえるが、それを踏まえての計画を策定してもらいたい。
- 資料を見たが、基本が高校標準法であることを感じた。法律に基づいてやらなければならないと思うが、歪がきているのだろう。県中央部と沿岸部の経済格差があり、さらに標準法でもって厳格に取り扱うことになると、教育格差が広がるのが危惧される。県は沿岸振興に力を入れるといているが、教育の部分を切り離すことはできないし、魅力ある学校づくりや沿岸部を活性化するため、教育に予算を投入してもらいたい。
- 教育の機会均等が心配になってきた。全国から岩手、岩手から沿岸・県北と同じように当てはめようとしている。「沿岸部にいくつの学校を配置する」と示してもよいのではないか。過疎や限界集落など、地域の現状をもっと考えてみるべきであるが、統廃合を実施した地域がその後どうなったか調査したのか。県は地域経済の振興を考えていないような気がするが、地域の経済をどう支援するのか。

地域別懇談会【久慈ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.12.9:於久慈地区合同庁舎]

- ・ 地域の小規模校を再編すれば、通学できなくなる生徒が出てしまう。地域に学校があるということは、その地域の活性化につながる。若者は、地域に学校がなければ、学校のある地域に移り住むだろう。お金のかかることであるということはわかるが、地域の実情を考慮して、小規模校であっても、可能な限り残してほしい。
- ・ 「基本的方向」では、小規模校については地域の実情をふまえて個別に検討するとの記述がある。この県北地域は、住民の所得も低く、公共交通機関も乏しい過疎の地域である。この地域の「今ある高校を存続する」ということを項目として取り上げ、県教育委員会として十分に議論し、高等教育機関の確保をお願いしたい。
- ・ 県民の声を1つ1つ丁寧に取り上げて、県民の声が第二次整備計画にどのように反映されたかが明らかに見えるようにお願いしたい。
- ・ 統合等で通学が不便になった場合の支援について、具体的にどのようなことを考えているのか教えてほしい。
- ・ 懇談会という形式の中での意見交換と受け止めているが、説明会的な要素が強いと感じるときがある。地域の意見、熱意を受け止める時間がもう少し必要ではないか。進め方をもう少し検討してほしい。
- ・ 再編によって地域の高校がなくなった場合の保護者の経済的な負担が心配である。経済的な理由で進学先を変更することがないように、子供たちに夢を与えられるような再編計画であってほしい。
- ・ 望ましい学校規模を1学年4～6学級とすると、このブロックでは久慈高校と久慈東高校しか残らない。地域の実情、保護者の経済的な負担などを考えていただきたい。また、高校標準法を、「岩手独自」で考えていくことはできないだろうか。
- ・ 小規模校の教員配置（教員不足）が問題とされているが、一人の教師が2校に指導するなど、生徒を動かすのではなく「教師を動かす方法」はないのだろうか。
- ・ 子供をしっかりと自立させるような科目等も、高校では必要ではないか。
- ・ 久慈工業は、専門的な知識、技能を持った人材を送り出してきた。県北地域のものづくりに関する唯一の学校である。また、久慈工業の生徒は、小中学生の手本となって、地域に大きく貢献している。少子化だけで再編を考えるのではなく、地域の産業、ニーズ等も踏まえて計画を立てていただきたい。
- ・ 県教委にビジョンがあることと同じで、地域にもビジョンがある。そのようなものには対応してもらえるのか。
- ・ 地域住民が高校生と一緒に勉強するというのを計画した場合、実現することは可能か。またそれはどこに相談したらよいのか教えてほしい。

地域別懇談会【二戸ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.25:於二戸地区合同庁舎]

- ・ 県北、沿岸地域のような、多くの学校が「3学級未満」というところでは、地域の実情にあった計画を立ててほしい。
- ・ 高校教育に関わる財政的な資料の提示がない。教職員定数の拡充が文科省から示されたが、地方自治体の裁量部分もあると報道された。しかし、お金の出せる自治体は教員を配置できて、お金の出せない自治体は教員の配置ができないとなった場合、新たな学力差を生んでしまうのではないか。
- ・ 岩手の高校教育における加配教員の実態はどうなっているのか教えてほしい。
- ・ 青森県、秋田県では、地域によって35人学級を導入していると聞いている。岩手県でも教育に力を入れてほしい。県として国に要望していくということも必要ではないか。
- ・ 昨年度の会も含めて、合計3回の説明を聞いた。結局は財政と関係するのではないか。以前、病院の維持に関わって100億円の赤字が出るという話を聞いた。しかし県は競馬組合に300億円出している。300億円あれば、「35人学級にした場合の年間経費15億円」を教育にかけたとしても、20年分の予算となる。県民の生活を守ることにはお金をかけてほしい。
- ・ 10年後の二戸ブロックの必要学級数が資料4に載っている。10年後は、一戸高校はかろうじて2学級、福岡工業は1.3学級、伊保内高校、軽米高校も小規模となる。そこで、「2学級が維持できる学校は残るのか」ということについて答えてもらえるか。
- ・ 県北は県北なりの学校の配置基準があつてよいのではないか。また、通学費の補助に関わって、その補助制度を今後も採用するのか、またその場合の割合はどの程度なのかについて、現在の考えを教えてほしい。
- ・ 「生徒数が1学級を割っても高校を限りなく残してほしい」などということをつもりはない。ある程度の方向性については、本日示してもらえないものか。
- ・ 「1学級に限りなく近い2学級校」はどう考えたらよいか。1学級をこえているから2学級とみてよいか、それとも四捨五入して考えたらよいか。
- ・ 今後、どうしても「高校の統廃合」は出てくると思う。その場合、通学費を全額補助した場合等の試算は示してもらえないか。
- ・ 高校生の遠距離通学の範囲（時間、距離）は県としてどのように考えているのか。
- ・ 食品関連の学科の配置について、地域検討会議ではどのような話が出たのか教えてほしい。